

令和元年度第2回北海道立図書館協議会 議事録

日 時：令和元年 11 月 28 日（木）14:00～16:00
会 場：道立図書館研修室
出席者：協議会委員 8 名、道立図書館職員 14 名
傍聴者：0 名

議事等

1 議題

「令和元年度事業の実施状況」について

2 その他

議事録 （○～委員の発言 ●～道立図書館職員の発言）

1 議題

「令和元年度事業の実施状況」について

○（木村 純 会長）

こんにちは。とても朝寒かったのですが、そのうえに突然の雪が降ってきまして、雪が積もっていて大変でした。そのようななかお集まりいただき、ありがとうございます。

前の会議と今回の会議の間に読んだ本の話をしているのですが、シアターキノで、『ニューヨーク公共図書館』という映画をしばらくやっていました。図書館の職員の方も見られた方がいたのではないかと思います。

岩波新書から菅谷明子さんの『未来をつくる図書館』という本が 15 年くらい前に出たのですが、これを読み返してみました。欧米では図書館は誰にでも開かれているので、そこで生活保護の手続きや失業の登録をしたり、コンピューターの使い方の講座を開いたり、履歴書の書き方の講座を開いたりという図書館が社会的役割を果たしていて、映画もそういうことを伝えています。

最近、瀬戸内市民図書館の館長で、今は奈良大学の先生をしている方が『図書館・まち育て・デモクラシー 瀬戸内市民図書館で考えたこと』という本を出されました。菅谷さんの著書もそのなかで紹介されているのですが、図書館が民主主義においてどんな役割を果たすことができるのか書かれていて、今、図書館が抱えている問題がほとんど網羅されているとても良い本だと思います。菅谷さんが言っていることも、私が共感できる中身になっています。図書館が誰にでも開かれていて、図書館の職員だけでなく、地域の住民とさまざまな形で勉強しなければならないということも書いていますので関心を持たれた方は読んでいただければと思います。

それでは委員の方々のご協力をいただきながら効率的に議事を進めていきたいと思っています。本日の議題は「令和元年度事業の実施状況」となっています。説明は利用サービス部長からお願いします。

●（伊藤 信彦 利用サービス部長）

令和元年度事業の実施状況について説明・・・資料 1、資料 2

○（豊田 恭子 副会長）

北方資料室の道政サポートサービスはすばらしいと思います。その辺のお話を・・・。

●（吉原 和夏子 北方資料室長）

最近北海道史編さんへの支援業務が増えています。編さん委員の方が月2回程度当館においでになって、実際に書庫で資料を探したり、当館においでいただけない委員の方にも必要な資料を道史編さん室に届けてご利用いただいております。

○（豊田 恭子 副会長）

確か北海道史はデジタル化も進めていると聞いたことがありますが、それとは関わっておられるのでしょうか。

●（吉原 和夏子 北方資料室長）

私どもは資料収集のお手伝いをしているのですが、編さん自体は関わっておりません。

○（豊田 恭子 副会長）

ここにすごくいろいろな資料があるということを委員の方に気づいてもらった訳で、今後続けていけそうな気運は？

●（吉原 和夏子 北方資料室長）

気づいていただいたということもありましょうし、もともとご存じといった部分もあると思いますが、いずれにしましてもまだまだ長丁場の事業でございますので、今おっしゃっていただいたことも念頭におきながら今後もサポートしていきたいと思えます。

○（豊田 恭子 副会長）

文書館とのこともあるし、今後のサポートというか待ちの姿勢もいいのですけれども、続けていけるような、資料を生かしていけるような、北海道史の編さんが終わった後も仕組みを作れたらいいなと思えます。

○（木村 純 会長）

ありがとうございます。他に何かございますか。

○（杉原 理美 委員）

令和元年度の実施状況を見せていただいて、こんなにいろいろやってらっしゃるのだな、同じ図書館であっても市の図書館として道立図書館さんを見上げる存在だと思いながら、仕事の範囲の広さ、視点の広さを改めて感心させられているところでございます。一つ思うところがありまして、ずっとやっている大切な事業を道民の皆様へ気づいてもらっていないのではないかなと思えます。こんなに素敵な情報誌を作っていらして、こんなにたくさん活動しており、やれることは網羅していると思うが、欲しい人のところへ情報が届いているのかこの辺のもどかしさは、どこの図書館でも同じことなのですが、もうやってしまっていることだからあえて伝えなくていい、ではなくて改めて伝えていく、新たな切り口で情報提供すると意外と「こんなことをやっていたの、知らなかった。」と気付いてもらえることもあるのではと思えます。もう少し新しい切り口で見せ方を変えていく、例えば他の場所に遠征して行って情報発信するとかいろいろな方法を試していただけたらと思えます。

○（木村 純 会長）

ありがとうございます。ちょっと私のほうからも。

7ページに展示コーナーの取組について書いてあって、前に伺ったときに「世界の蔵書票」展をやっていてとても楽しかったのですけれども、ホームページを見ていたらこういう情報は得られたと思うのです。こんなにたくさんいろいろなことをやっていたのかと気がついたのですが、「評価」というか、一つ一つの行事にたくさん参加した、参加しないというのを私はそれほど重視しないのですが、この取組に何人いら

っしかったか、どういう手段で情報を得てここにいらっしかったか、評価をするための資料を集めることをされているのかお聞きしたい。

● (伊藤 信彦 利用サービス部長)

展示についてはホームページで開催内容を周知しているところでございます。が、御覧になっている方の感想ですとか、どういう方法で展示を知ったかというアンケート的なことは特に行っていない状況です。

「平成の展示」については、丸いシールを興味のあるテーマに貼ってもらうということで関心の度合いを把握することについて実施したことはございます。そのへんを周知を含めて考えていきたいと思えます。

○ (木村 純 会長)

すべてのイベントでやるということは大変で、できないと思うけれど、一つ一つの行事にどれくらいの方が参加したとか、どういう感想を持ったのかとか、どういう手段で情報を得たのかいくつか選んでそういう調査をする、というのは社会教育で大事だと思います。他に如何でしょうか。

○ (西村 宣彦委員)

情報発信ですが、年齢が高いとツイッターよりもフェイスブックへ行くのかな、ターゲットを踏まえてもう少し SNS をやる余地があるのかなと思えました。

資料を読み込んでいないだけかもしれませんが、リニューアルしてから入館者は増えているのでしょうか。

● (伊藤 信彦 利用サービス部長)

入館者数につきまして、4月のリニューアルオープンの時はお待ちになられていた方がかなりいらっしまったという状況にあるのですが、その後平準化して、通常開館していた平成28年度と同程度、下まわっているときもありまして、盛り返したのは4月だけという状況です。

○ (西村 宣彦委員)

以前とそう変わっていないということですね。増やすためのリニューアルというよりもアスベスト対策が主目的だったかと思うのですが、私も委員になったばかりの頃は素人で、交通の便も悪い、なかなか利用しにくいなという感覚的なものを持っていて、もう少し来館者を増やすようなことをやれないかと。

岩淵館長が図書館報の巻頭言で率直に書いていらっしゃっていて、私も委員を続けるなかで多岐に渡ってきめ細かに道立図書館としての役割を果たしていることをよく理解するようになって。最初、素人感覚で道立図書館がもっと多くの人が集えるようになっていけばいいのにといい思いも捨てきれないといいますか、そのためにやれることってなんだろう、より追求していくことが必要なのだろうか、何をどうすればというのがなかなかでてこない。例えばイベントがいいのかわからないけれど、ここってこんなすごい資料があるのだよと知ってもらえるような、古本を売っていたり、飲み食いだったり、図書館まつりのようないろいろな地域を巻き込んだりして来館するきっかけを作っていくようなことってできないのかな、というそんなことを考えました。病院でも「病院まつり」をやったりしている所もありますので。

○ (木村 純 会長)

今年は台風で、図書館まつりが中止になって、そちらはやっているのです。すごく私は残念だなと思っているのですが。交通の関係で言うと、札幌市図書・情報館が開館した影響は相当受けているのではないかと思います。

中央図書館は、街に住んでいる人にとってはむしろこちらに来る方が便利なのですが。札幌市図書・情報館が開館する前の閲覧室は北大の名誉教授が自分の研究されていたりすることがあって、情報館ができて都心に便利な所ができたことはすごく

影響があると思う。

私はいろいろな所で授業をして、例えば北海学園大学の学生に道立図書館がどこにあるか知っているか、使ったことがあるかと聞くとほとんどが知らない訳で、一度来てもらうことが大事です。文書館ができるときは関心が高まるので、そういう時を利用して、一回は来てもらって、こういう図書館があるのだと知ってもらうことがすごく大事なことと思います。何だか私が答えてしまって、皆さん如何でしょう。

● (岩淵 隆 館長)

入館者数については気にしてはいますが、毎日入館者数を眺めては今日みたいな天候の日は非常に少ない。多いときは400人くらいなのですが、率直に申しあげてさきほど部長が言いづらそうにしていましたけれど、入館者数は日によっては2割、3割同時期よりも落ちていると思います。閉館している間に新しい場所を見つけたということもあるのかと。私は行政職で専門家ではないものだから、じゃあ、何ができるのか、居心地の良い空間を作り出すしかないと思っていますので、司書に意見をもらいながら、例えばえほんコーナーに子供たちの夢をはぐくむような展示をしてくださいますと言ったらすぐ人形を買ってきて、例えばムーミンだったら周りにムーミンの本を置いてくれてとかそういうことをすぐやってもらったりしています。ホームページですが、今の契約上、なかなかツイッターなどを全面に出すなど一年後までリニューアルできないものですから、いただいた意見を参考にして、SNSを使ったり、アンケートをやりたいと思っていますので、近いうちアンケートを実施して何を改善していったらいいのか今後とも考えていきたいと思っています。ご意見ありがとうございました。

○ (豊田 恭子 副会長)

いくつかあります。

入館者数の話が出たのですけれども、運営計画の基本的な数値が抜けている気がして。入館者数、蔵書の購入数、イベントの参加者人数であるとか指標が見えないのですよね。蔵書の購入の予算の数値を出してくださいとお願いしたこともあるのですけれど。さきほど杉原さんが言われたように、こんなにたくさんやっているのにね、しか見えなくなってしまうので、これからもう少しめりはりつける必要があると思っています。どこでめりはりつけるかという予算でしかないと思っています。事業を絞るのは難しいことなので予算でめりはりをつけるしかない。北方資料から打って出る計画がでてこないのはすごく残念なことだと思っています。道立図書館がアピールするのは北方資料しかないと思っています。文書館と一緒にいる時はいいチャンスで存在意義をこのチャンスを生かして、北方の豊かさと意義を道民、議員にしっかり理解してもらわないといけない。来年の予算が佳境に入っていると思いますが、そこでもめりはりをつけてもらいたいし、前回お願いした北方の複本の購入で貸出を伸ばしていくやり方があったりとか。私はビジネス支援協議会の代表としてここにいますが、ビジネス支援は止めたっていいと思っています。道立図書館でしかやれないことをしっかり打ち出す方がいいと思っています。

SNSの話が出たのですけれども、最近読んだアメリカの本で、図書館の利用者を顧客のように扱うのはもうやめよう、図書館は顧客サービスではない、そこにいる住民と一緒に図書館を作っていくパートナーなのだ。住民と一緒に図書館をどうやって作ってあげればいいのか考える形で計画をたてていくことが大事。顧客のように利用者を扱っている限り図書館の発展はうまくいかないのです。地域コミュニティを図書館が中心となって作っていかうとすると、ボランティア、利用者、道史を編さんする委員が利用しているのであれば、図書館だけSNSを使うとかではなく、そういう人を巻き込んでその人たちに発信してもらおう。はっきりいって図書館よりはるかにフォロワー数の多いツイッターのアカウントにしたって、フェイスブックのアカウントに

したって持っている利用者をごまんという訳ですから、その人たちをどうして利用しないのって思うのです。例えば図書館の展示についてツイートしてくれた人にポイント1点とか、この行事についてフェイスブック発信してくれたら図書館グッズが当たりますでも何でもいいのですよ、何か知恵を使ってどうしたらこの良さを拡散していけるのかも少し考えてほしい。それを計画として出してほしい。この運営計画が悲しいのですけれど。

○（木村 純 会長）

如何でしょうか。賛成できる部分と必ずしも賛成できない部分があるのですけれども。

評価が大事ということになっているけれども、道立図書館のミッションとの関係でどう評価するかという話し合いはまだまだ不十分なのかなという気がします。

評価でいうと、静岡県立博物館のようなベンチマーク方式というのか、ミッションとの関わりでどういうことを物差しにして評価するのかを図書館全体で話し合いをしながら、今集められる資料と新たに集めなければいけない資料といろいろ検討しながらやっていく、そういう作業を図書館全体で今までの評価の在り方を見直すなかでやっていくことは考えた方がいいのかなと思う。文書館との新たな体制のなかでどういう風に考えていけばいいのかということとは図書館のなかで丁寧に話し合いをしながら考えていくチャンスではないかと思う。

○（豊田 恭子 副会長）

今年、札幌市図書・情報館がライブラリーオブザイヤーを取得したのですよね。賛否両論があると思う。私も手放しですばらしいとは思わなくて、いろいろな課題を抱えながら1つのアンチテーゼとしてああいう形で踏み出したというのは評価されるべきだと思っています。図書館って1歩踏み出すのがとてもこわい人たちがいっぱい、公務員というのはそういうものなのでしょうけれど、継続性が大事である、私もそのとおりだと思う。ただ、ああいうとんがった図書館がライブラリーオブザイヤーに選ばれるというのはある意味で総花的にすべてやることに皆疲れていて、何かを切り捨てるけれども1つ新しいことに踏み出すことに拍手を送る、そういうマインドも今、図書館にあるのかと感じています。リスクを抱えているし、札幌市の場合、1分館がああいうことをやっていて中央図書館がしっかりバックにいる体制で実現できたことと道立図書館のように北海道全体の図書館界の責任を担いながらやるのとでは、もちろん役割も違うとは思っているのですが、もう少し踏み出していいかなというのが私の個人的な意見です。

○（木村 純 会長）

すぐやりとりをして結論がつくことではなくて、札幌市図書・情報館の場合は司書の人たちがすごくがんばっているなというのはよくわかる。原稿を書くのに北大の図書館だったらいろいろな階に行かなければならないことがコンパクトにまとめられていて、こんな本も揃えているなとか、すごくがんばっているなと思う。あれも1つの在り方で、道立があればいいのかということとそうでもない。なかなか難しい。道立は司書がたくさんいるので司書の人たち一人一人がやりたいことがやれている、そういうことが伝わってくるようなそういう図書館にしてもらいたいなという風に思っています。

○（西村 宣彦委員）

図書館は本が集まる場ではあるのですけれども、札幌市図書・情報館もそうですが、本が集まりつつ人が集まる、そういうことを意識してほしい。市町村の支援も大きな役割だとは思っているのですが北方資料を活用してコミュニティを作っていく方向性でも、もう少しできることがあればいいなと思います。

○（木村 純 会長）

他に如何でしょうか。

○（竹次 奈映委員）

20代としての意見になるのですが、報告書のなかでツイッターを使っているということで9月末現在1,530ツイートされているのですが、ツイートに対するコメント、リツイートはどうなっているのでしょうか。

●（中田 こずえ一般資料サービス課長）

中田です。主にツイッターで「いいね」が多いのはイベント関係、見学ツアーとか、先程から地域住民とか言い方はいろいろですが、外部の人が関わるとリツイートが増える傾向があるなと思っています。

○（竹次 奈映委員）

SNSはコミュニケーションができるのがいいところだと思うので、ツイートして投げっぱなしというよりはコメントをつけたりですとか、投稿すればするほどフォロワー数が増えていくと思うので1,530ツイートの他にフォロワー数がどれくらい伸びているとか書かれていると一つの指標になるのかなと思います。他にweb研修で、動画をネットで拝見したのですが、すごくわかりやすくておもしろいなと思いました。ツイッターとか動画投稿もできるのでおもしろい。イベントもたくさんやっているのでフェイスブックを使うとおもしろい。フェイスブックはイベントページというのがある、いろいろなイベントに参加する人はフェイスブックを参考にする人が多いと思います。滝川市立図書館、小樽市立図書館とかは動画がユニークでヤフーニュースでも取り上げられていてヤフーニュースに載れば広報的には成功なのかなと思うので、積極的に使えたらいいのかなと感じました。

○（木村 純 会長）

ありがとうございます。私などはついていけないところもあるのですが積極的にご意見ありがとうございます。他に如何でしょうか。

○（京谷 正博委員）

事業の実施状況ですが、道立図書館ですからかなり制約があるのかなと感じているところです。道の条例に基づいてきちんとやっていかなければならない道立図書館は運営が難しい。しかし、札幌市は一つの戦略として中央図書館を中心として、一つ別なものを作ろうとやっている。道立図書館の場合、地域住民が道民となるとかなり幅広い。何をもち地域住民とするのか、江別の情報図書館や岩見沢市立図書館とは全く違う視点で運営しなければならない。そこは基本的なところで逸脱されては困るかなというところもあるので、僕なんかはこの網羅されている内容をきちんとやられていることは非常に評価している。

もう一つ、僕は大学図書館に長くいるのですが、資料があって図書館というのがあるので資料の充実というのを手放さないでほしい。予算的にも一定程度きちんと確保してもらいたい。利用者が何を求めている、何に関心があるのか、そこは市町村立図書館に一定程度任せて、道立はまた次元が違う形で資料の整備とか行政レベルでのサービスを行っていただきたい。文書館が新しくなるけれども文書館は特殊な専門図書館ですよ。それを利用する方、研究者とか一般の利用者とは違った形、それに近いのが北方資料、北方資料室の資料を一般市民にとってもなかなか。それよりも北海道史編さんなどの研究者と広く交流しながらやっていくという感じで、基本的なところを資料という形でおさえたい。

○（木村 純 会長）

ありがとうございました。札幌市民カレッジで一度ずいぶん前ですが、郷土史に携わっている人たちがシンポジウムをやって、たくさんの方が関わっている。そういう

人たちがもっと道立図書館の役割を理解したら足を運ぶことになるのではと思いますけれど。だから工夫する余地はまだまだあると思います。他に如何ですか。

○（豊田 恭子 副会長）

以前、ここでご紹介した気もしますが、ウィキペディアタウンをご存じですか。あれなんかは専門家も出てもらって OK、住民も巻き込みながら郷土史を最大限に活用できるツールだと思っています。北方資料を使いながらウィキペディアに対して北海道の歴史であったり地域であったり情報コンテンツとしてあげていく。数年前から言い続けているのだけれど是非やってほしいことです。レファレンス協同データベースなんかレファレンスがこなかったとしても、フェイクで回答を作ることも今は認められているので閲覧数が増えていくことで、この存在意義が高まっていく。郷土資料って一部の人のものではなくて、たくさんの人を巻き込めるものだと思うので。レファレンス協同データベースの登録数も数として出てこないのを知りたいところであり

●（桑原 裕子室長）

事業の実施状況の 5 ページのところに・・・。

○（豊田 恭子 副会長）

それは閲覧数ですよ。私が聞いているのは今期登録した数です。

●（桑原 裕子室長）

閲覧数だけでなく、登録数ということですね。

○（木村 純 会長）

他に如何でしょうか。平田委員、何かございますか。

○（平田 弘子委員）

私は PTA 連合会なのですけれども、ホームページの見直しをかけていて、今現在閲覧している方々が何を求めているかというあたりでアンケートをしていて、図書館もそうだと思いますが、活用する方を増やししながら今活用している方々のご意見もお聞きしなければいけない。自分も学校におりましたので、教育局、市町村の考えを受けながらやっていたのですが、ここに書いてあることがすべてやらなければいけないことであり、またやりたいことだと思います。学校運営も、全部が重点だと思うのですが、何か目玉になることがあるといいのかなど。それから今の時代なので HP や SNS で広げていくのは大事なのかと思っています。

○（木村 純 会長）

ありがとうございます。中村委員は。

○（中村 真実委員）

イベントの告知が一番反応が高いと感じるのはどのような方法でしょうか。HP、ツイッター、リーフレット等募集告知は他にもいろいろとあると思うのですがわかる範囲で教えていただければと思います。

●（中田 こずえ一般資料サービス課長）

テーマによって違うのですが、ミニコミ誌、地域紙を見てという方が多いように思います。あとは道新や、何かのイベントのときに次のチラシを置くとか、北海道ブックシェアリングさんのようにあちこちでイベントをしているところにチラシを持ち込むとかをしています。

○（中村 真実委員）

ありがとうございます。ツイッター上でもアンケートができるようなので、質問とかを投げかけてみるのも面白いかもしれないと思います。

- （中田 こそえ一般資料サービス課長）
勉強したいと思います。ありがとうございます。

- （木村 純 会長）

ありがとうございます。他に如何でしょうか。皆さんにご意見いただきました。これを踏まえて図書館で検討していただいて、さらに評価の進め方を前進させるようにしていただきたいと思います。令和元年度事業の実施状況の議論はこれでよろしいでしょうか。次に、その他事項について説明いただきたいと思います。

2 その他

- （吉原 和夏子 北方資料室長）

資料3について、説明

- （桑原 裕子 一般資料室長）

資料4、資料5について、説明

- （伊藤 信彦 利用サービス部長）

資料6、資料7について、説明

- （木村 純 会長）

ありがとうございました。

ただいま資料の3から資料の7までの説明がありましたけれども、何かご質問ありますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは特になければ、以上で今日予定されていた議題の審議を終了したいと思います。

どうもありがとうございました。